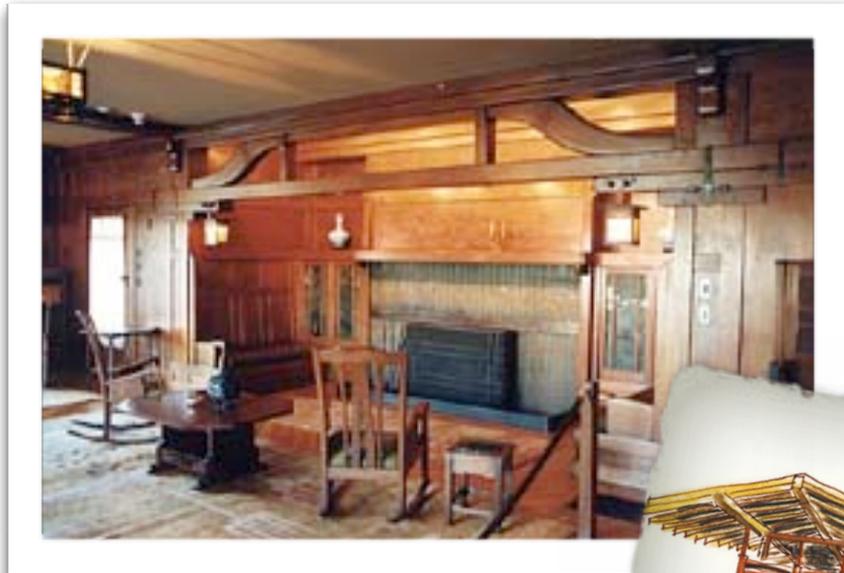


ギャンブル邸



アメリカ ロスアンゼルス

ロスアンゼルス北部郊外のパサディナは古くから裕福な人々の週末別荘地として開発されてきました。その一画にアメリカン・アーツ&クラフツの代表作となった「ギャンブル邸」があります。プロクター&ギャンブルという著名な大企業の二代目社長であるデイビット・ベリー・ギャンブルがチャールズ・サマー・グリーン（1868～1957）とヘンリー・マザー・グリーン（1870～1954）の兄弟に設計を依頼し、1909年に完成した住宅です。

ギャンブル夫妻は自宅建設に際して、富裕な人々が好む豪華で装飾に富んだ住宅ではなく、控えめで素直で正直な生活を反映する健康的な空間を持ち、自然に調和することを求めて、グリーン兄弟に設計を依頼したのです。グリーン兄弟はその近くで設計業務を行っており、彼らの作品が夫妻の目にとまったのである。

当時、英国のウィリアム・モリスが起こしたアーツ & クラフツは米国にも波及しており、グリーン兄弟もモリスの思想に共鳴し、手づくりの職人技を極めることにより、建築を芸術にまで高めることを目指していました。興味深いのは、彼らを建築設計の世界に導いたのはシカゴで開かれたコロンビア万博での日本館の存在でした。そこで見た日本の木造建築の機能的で有機的な美しさに、彼らは自分たちの目指すアーツ & クラフツの方向を見いだしたのです。



さて、この住宅の建設に際してギャンブル夫妻の希望は次のようなものでした。気候、環境、入手可能な素材、趣味と生活形式にあったデザイン……。これらの項目をみているとまるで現在、我々が直面している問題点をそっくりそのまま指摘しているように思えてきます。



グリーン兄弟はこの希望を自由な発想で消化し、デザインを進めていきました。切り妻の屋根が大きく張り出している表情にはメキシコの木造住宅の面影を見つけることができますし、垂木や梁の細工にはヨーロッパ北部の伝統的な木造建築の影響がみられるといった具合です。そして、室内に入れば一挙に日本のにおいがしてきます。



玄関の開き戸は松の木をデザインしたティファニーのステンドグラス。階段下のベンチから手摺りに至るマホガニーの美しい造作には、思わず日本の大工、建具職人の唖然とした顔が浮かんでしまいます。リビングの暖炉には長押もあれば欄間のようなものもあって、どこかギコチなくても、日本の美のエキスが100%以上反映されているような気がして、思わず身体が引けてくるのを感じました



グリーン兄弟は木の部材は力尽くで結合させるのではなく、複雑にかみ合うパズルのように合せなければならないと考えました。つまり、部材達が接合金物を通して一体化し、全体として働くことを重視し、その接合部を芸術作品のように美化していったのです。